

2008年12月20日

ABEF 行動経済学会特別セッション「行動経済学は政策に役立つか？」

基調スピーチ

行動経済学による「監視なき」監視社会

松島 齊

東京大学大学院経済学研究科

行動経済学は経済学における「合理性」に貢献している

行動経済学の政策へのアプローチはそれ自体が経済学の分析対象である

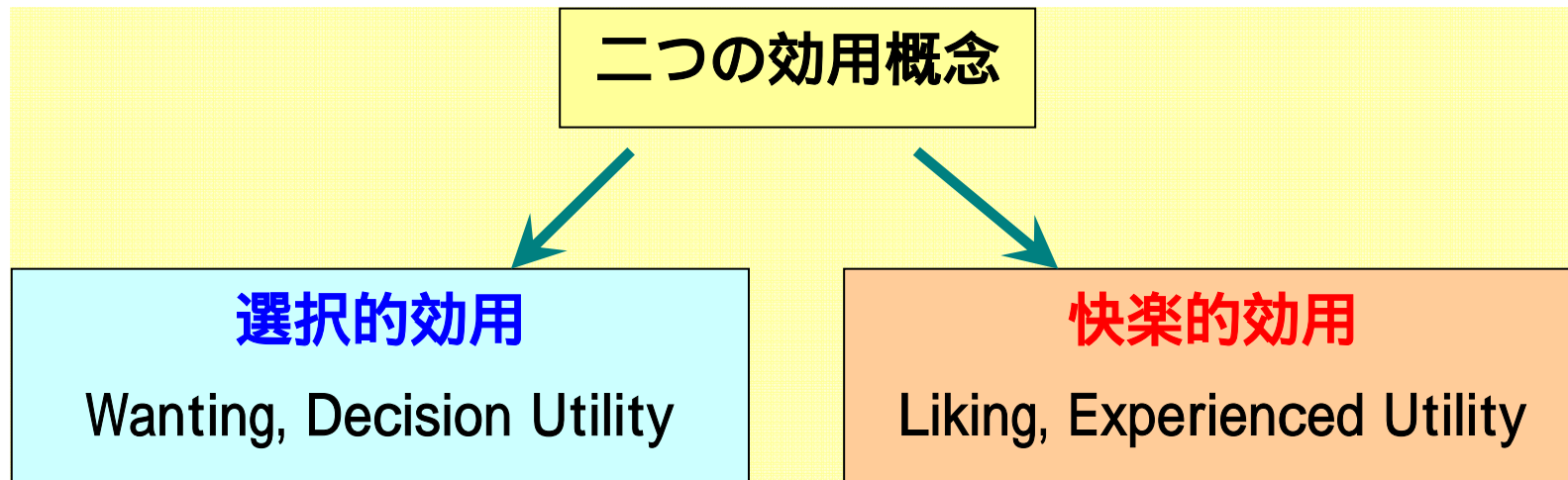
経済学は「社会的影響を受けるケース」と「社会的影響から逃れるケース」をともに分析するべきである。そうすることによって「自立的個人」の解明を目指すべきである。

科学としての経済学

「経済学は社会科学であり、**選択にかかわる経済問題**を系統的に分析するものである。」

(スティグリッツ/ウォルシュ「ミクロ経済学」第一章)

選択：一義的評価基準 実証分析による基礎付け



「経済学における効用」 = 「選択的効用」

選択のパターン

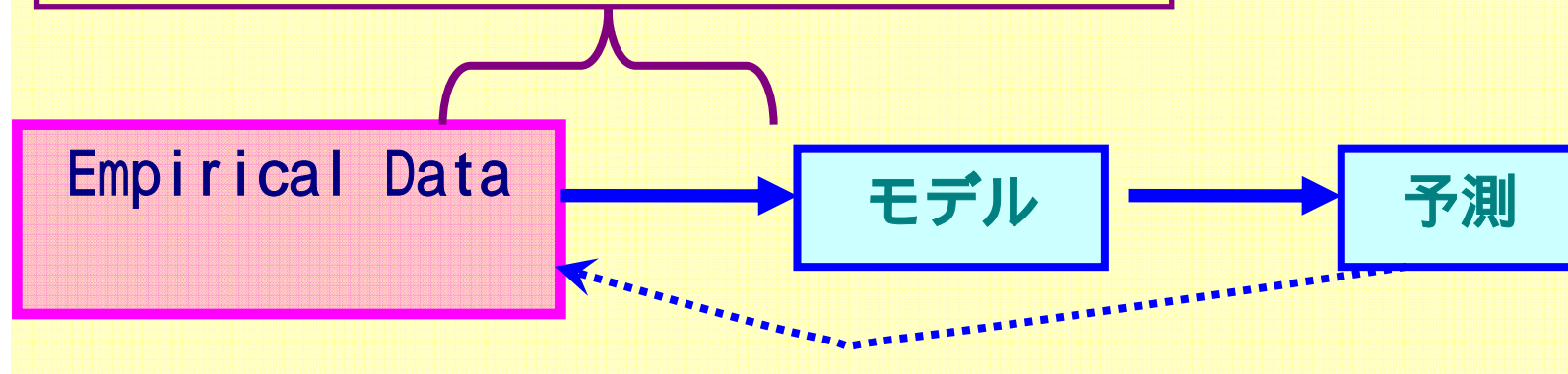
Revealed Preferences

パレート効率性

「選択のパターン」の解明

経済学における「合理性」 = 「規則性」

行動経済学的知見：「合理性」に貢献



経済学における「快樂的効用」

政策決定に個人間比較を導入

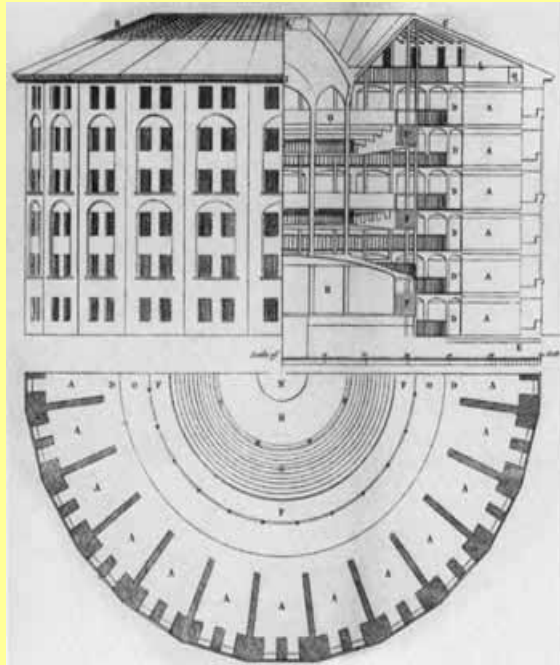
「快樂的効用」 = 「快樂の代理変数」

(所得、教育、医療・・・)

選択的効用と整合的であることが前提

「多くの経済学者は、個人間の効用比較には意味がない
と考えている。」(スティグリッツ「公共経済学」第三章)

行動経済学の「パノプティコン・パラダイム」



パノプティコン(一望監視システム)

ベンサム設計の「監獄」



Bentham in UCL

行動経済学

快樂的効用は選別的効用と整合的でない

快樂には一義的評価基準がある

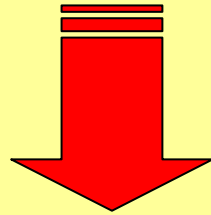
いずれ快樂の適切な代理変数を計測できる

“...a case in favor of some paternalistic interventions, when it is plausible that the state knows more about an individual's future tastes than the individual knows presently.” Kahneman (1994)

“...we will eventually be able to replace the simple mathematical ideas that have been used in economics with more neurally-detailed descriptions.”
Camerer (2005)

行動経済学における「合理性」 = 「快樂的効用の最大化」

快樂的効用を最大化していない
「まちがった」選択をしている
国家はそれを正す立場にある



福祉国家（生活の向上）

経済学の立場

快樂に一義的価値基準はない

代理変数の計測の「正確さ」は変数の「正当化」にならない

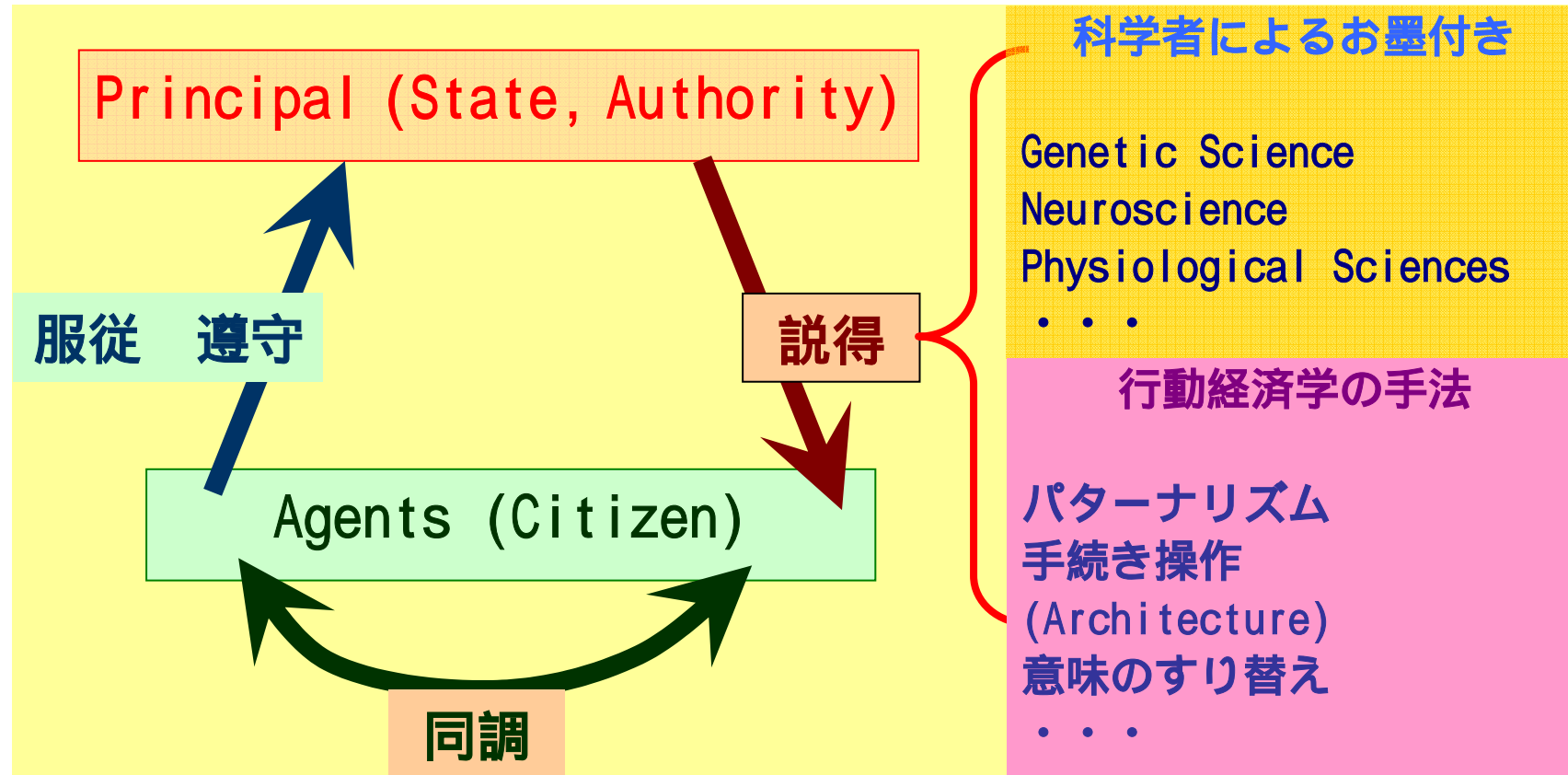
代理変数自体が持つ意味が利用される（意味のすり替え）

行動経済学は権威者が自己の意図を実現させるアプローチ

行動経済学それ自体が経済学の「分析対象」として重要

パノプティコン・パラダイム

(Principal-Agent without Mechanism Design, Matsushima (2008))



行動経済学者としてのベンサム

パノプティコン = 理想の福祉国家像

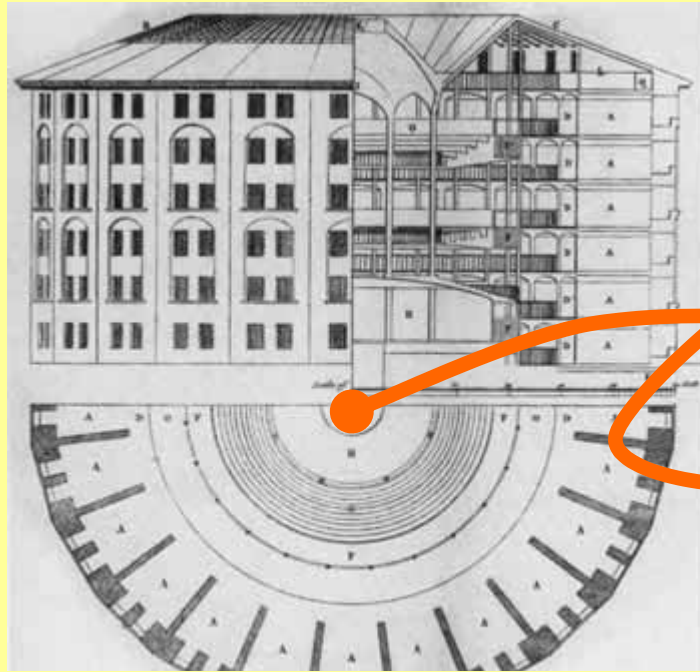
「強制」から「非強制」へ

「選択の自由（？）」を提供

Libertarian Paternalism

「在」から「不在」へ

監視なき監視社会



OUT!



監獄

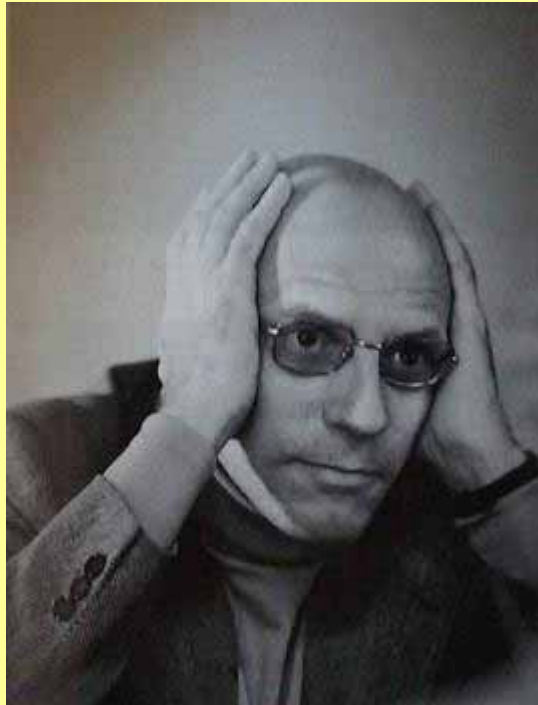
病院

学校

職場

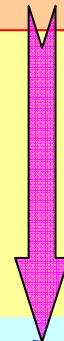
...

高度な福祉国家（監視なき監視社会）



フーコー（監獄の誕生・・・） による警鐘

高度福祉国家 VS 自律的個人

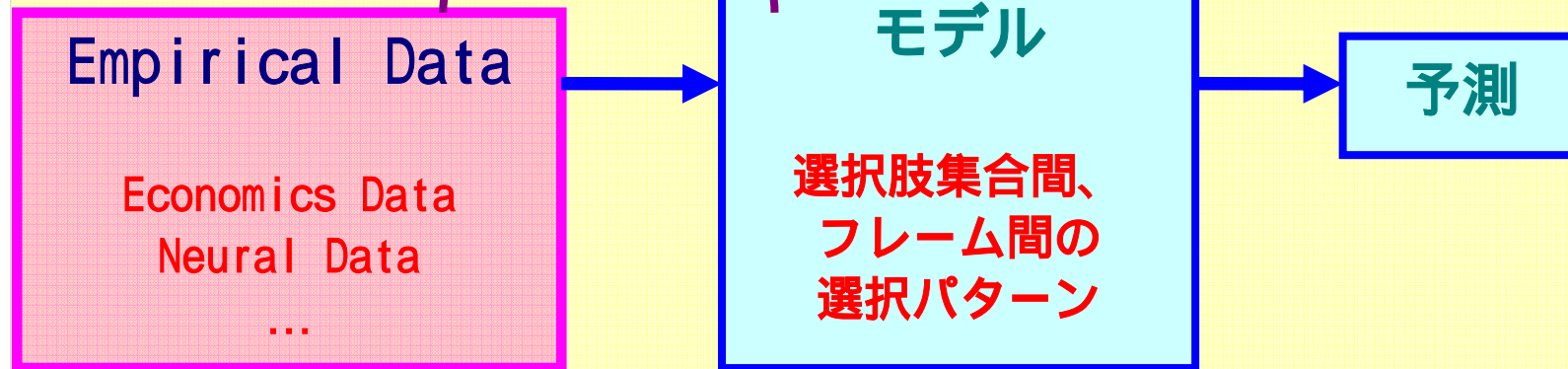


経済学は、この警鐘にどのように向き合うべきか？

(再び・・・) 「選択のパターン」の解明：
実証分析による基礎付けの困難さ

「合理性」 = 「規則性」

選択肢集合、フレーム・・・
行動経済学仮説



経済学がめざすものは？

自律的個人の解明

「社会的影響を受けているケース」

「社会的影響からのがれているケース」

実証困難な選択パターンのモデル化必要

選択肢集合間の選択

フレーム間の選択

...